

キーノートスピーチ

観光庁長官 溝畑 宏



皆さん、どうもこんにちは。みなとオアシス全国大会に当たりまして、このような場にまずお招きいただきまして、まことにありがとうございます。観光という世界の中におきましても、私はこの港の持つ意味は非常に大きいと考えております。いま世界各国、アジアの主要都市の観光戦略を見ておりましても、このウォーターフロントと、そしてまたこの港湾政策、そしてまた海上政策をタイアップして、総合的にこの観光を進めているというのが、このアジアの主要都市の戦略です。そういう意味からも、このような50余りの港がネットワークを結んで、マリポートツーリズムを推進していこうということは、極めて重要な意義があると考えております。

また、来年の大会が福島県のいわきの小名浜であるということでございまして、このような決定につきましても、大変感謝申し上げたいと思っております。東日本大震災におきまして、私も被災地を各地回り衝撃を受けました。東北の港といえば流通のみならず、そこに一つの文化がありましたし、特に魚をはじめ漁業におきましても非常に大きな生産拠点になっておりました。こういうところが甚大な被害を受けておりまして、私もいわきの小名浜、塩釜、八戸、そしてまた宮古と港を回りまして、この被害を受けられている（港に）一刻も早く復活をしてほしいなという思いを持っておりました。そういう中で、東北復興の意味を込めて来年開催していただくということは大変ありがたいなと、まず皆さんに感謝したいと思っております。

そしてまた、これから海外から外国の観光客を呼ぶというときに、当然のことながら（日本は）島国です。島国ということは空から来る部隊と、そして海を伝ってくる部隊がございまして。来年に向けて関係者の皆さんのおかげで、かなり多くの、しかもスケールが大きくなったクルージング船が日本に来ることになっております。そういう意味からも、今日お見えの皆さんが、単に受け入れるだけではなくて、そこに文化プラス交流プラス観光という色を出していただくことによりまして、まさにこのインバウンドの増加にも大変大きな役割を皆さんが担っていただけると期待しております。

短い時間ですが今日、皆さんにお話し申し上げたいのは、今後日本が活性化していく上で、ぜひ皆様のそれぞれ持たれている歴史、文化といったものと、皆さんの地域が持たれている観光資源をうまく組み合わせることによりまして、その地域が活性化をしていく。まさに、皆さんの持っている港は必ず歴史があります。私も各港を回りまして、必ずそこ

にあるのは歴史、交流そしてまた流通、そこにまた漁業などの生産、もう一つは必ず物語があります。また港といえば必ず演歌に出てきます。それは、ある意味そこには出会いと文化と交流と恋（恋物語）があるんです。

横浜の市長さんと話をし、これからはもう一遍「恋するまち、横浜」をテーマに、恋人がどんどん歩けるまちにしていこうということで、いま市長さんは一生懸命やられています。そんなふうにもう一度この歴史、文化をひもとく必要があるかなと。そういう意味からも今、神戸の副市長さんからお話ありましたが、平清盛公が過去に、ここに日本のすばらしい港をつくろうと夢を話したとか。そしてまたここは淀川長治さん、昔、映画が一番に発祥した地です。そういう皆さんの港には恐らくそういう歴史、文化、交流があったはず。そういうものをもう一遍掘り起こして、先人のそういった志とか夢をもう一度共有する。東日本大震災は多くの被害を受けましたが、私は改めて日本の魅力をもう一度再生するチャンスだと見ております。

そういう意味からも、このウォーターフロントの皆さんのこのみなとオアシス（全国）協議会の中で、ぜひそういったそれぞれの持っているコンテンツ、魅力をもう一度コンパクトにまとめて、いわば日本に来た世界に向かって、こんなにすばらしい港がいっぱいある、博覧会、万博だと、エキスポのウォーターフロント版をつくるんです。それをセールスするのであれば、できれば英語、中国語、ハングル語、外国語表示のそういったものをぜひつくっていただければ、我々と連携をとらせていただきまして海外にどんどんセールスしていきたいと思っています。

日本に行ったらこんなすばらしい港がある、おいしいものを食いたいときはこういうところに行こう、歴史を感じるならこういうところに行こう、あるいは夜景を見たいのであればここがベストスポットだというコースを六つぐらいつくるんです。クルージング船は多分そういう考えでやっておりますが、クルーズはどっちかという、どうしても港湾の規模ということから、中身というよりも形式からコースが決まってきます。港湾のサイズにかかわらず、コンテンツでそういったコースをつくっていく。こういうことも非常に重要ではないかと思っています。

最近、特に私はこの夜景の中で目をつけておりますのが瀬戸内です。この瀬戸内の景観は、アジアでも世界でもトップレベルです。こういうものも皆さんが連携をとって、それぞれをコンパクトにまとめて……。ただこれからは大事なんです。人に売り込みをするということは、それぞれ国または年齢、年収、規模、そしてまたその生活水準、文化度によって全然違ってきます。どこの層を攻めていくのか。こういうことを皆さんでお考えになって、セールスをするときの営業、マーケティングということぜひ皆さんで議論いただきたいと思います。

少子高齢化、人口が減ってきている。そしてまた、情報化、IT化、そしてまた低コス

ト。それこそ円高プラス、飛行機も今ローコストキャリアによって 9,800 円で日本からマレーシアに行けたりします。そういう中で言えることは、観光といえば国内観光がメインで、海外の観光はどちらかといいますとウエートが小さかったのです。これからは、日本の各地すべてが世界、アジアのマーケットの競争になります。お金を5万円持っておりまして今まで国内に行ったお客さんはどこに行くかといいますと、いま羽田空港に金曜に夜になるとOLがいっぱい集まっています。バンコク、シンガポール、コタキナバルそしてパラオ、こういうところは、大体3時間から6時間ぐらいで行ってしまう。しかも5万円以内です。1日あたりのコストは日本の大体5分の1です。こういうところの顧客の中で我々は競争の中にさらされてきたんです。

ただもう一つ皆さんに申し上げておきたいのは、大きなチャンスが開いているということです。人口1億3千万人、間違いなく減っていきます。ただ、まだまだ観光需要は眠っています。1,400兆円の個人の金融資産があるにもかかわらず、まだまだ有給休暇取得率も低い、旅行にもあまり行かない。ということは、日本国民一人一人がまだ日本の魅力に気づいていないのです。これは我々の努力不足もあります。もっともっと日本の国内のすばらしい魅力を掘り起こせば、それに合うだけの需要はいっぱい眠っています。これがまず一つです。

ですから皆さんにぜひお願いしたいのは、皆さんがお持ちのところの資源を徹底的に掘り起こしていただきたい。しかもやられるときは、皆さんの関係者だけではなくて、それこそ自治体、商工会、農協、漁協、大学、メディアを含めたさまざまな関係者を集めて、そのブランド掘り起こしの作業を地域全体でやっていただきたいと思います。そこで知恵を出し合って、それをいかに売り込むのか。こういうプラットフォームをぜひ皆さんでつくっていただきたいと思います。

その上で、もう一つ海外のことを申し上げておきます。去年海外から旅行者が861万人来しました。昨年、世界中を旅行した方がアジア太平洋地域に来られた数は2億人です。これが10年後4億人に増えます。背景は皆さんご存じのインド、中国、ベトナム、タイ、ミャンマーそしてインドネシアという国が、経済成長が出てきます。やはり海外旅行をする人は最低年収300万ないと行けません。こういう層が一気に4倍、5倍にふえていきます。ということでありまして、大きなアジアの顧客がマーケットを拡大していく。そういう方々のパイの奪い合いになるわけです。

そこで我々が考えておりますのは、4億人のうちの2,500万人を日本に持ってこようと。人口全体は減っていますが、内需をもう一遍掘り起こし外需を取る。そうすることで経済を活性化させる。その営業的な中の突破口になるのが観光です。観光といいますとレジャー産業、物見遊山のイメージがございしますが、これは明らかに違います。ほかの国を申し上げておきますと、韓国は文化・体育・観光部です。文化とスポーツと観光をセットでや

っています。ほとんどの国が観光省とかスポーツ観光省、あるいは総合戦略何たら省とかいう名前になっています。

私ども最近、観光は総合戦略的知的産業と言っています。今ある地域のものを、掘り起こしてつなぎ合わせてブランド化して商品化する。ですから単に来てくださいということではないのです。コーディネートするのです。そういうふうにして、いい商品をつくっていく。そして、うまくいけばそれは一気に世界を駆けめぐる。そういうことを皆さん、ぜひ意識していただきたい。

ですから、私が申し上げました英語、ハングル語、中国語、できれば10カ国ぐらいの言語を用意して、海外に今から売り込む準備をする。10年後、間違いなくアジアの中の大きいマーケットの中で、パイの食い合いになっています。そこで日本が優位性を確保するには、まさにこの日本の交流の窓口になられている皆さんの50余りのみなとオアシスが、そういう重要な役割を担うことが大変に我々にとっては大きい問題になってきます。ぜひ、そういう意味で頑張ってください。

港を一つとりましても、さまざまなシーンがあります。例えば産業観光。川崎のあたりは工場を見るのも観光です。港湾のそういったいろんな施設、古い施設といったものを見るのも観光です。物をつくる、物を見る、そして港にはウォーターフロントがあります。ボート、ヨット、水上スキー、スポーツを楽しむというものもあります。いわゆるスポーツ観光です。

そして神戸のように、ここに来てついでにいろんな楽しみがある。近くに温泉が楽しめる。そしてまた近くには、例えば野球が見たい、神戸のスタジアムに行けばプロ野球が見られる。そういうスポーツを見る楽しみもある、する楽しみもある。そんなふうにスポーツ、文化、産業、あと食文化、ファッションもあります。恐らく皆さんのフロントのところにも、これだけ交流があればさまざまなデザインとかファッション、文化があるはずで。そういうものを一つの観光資源につなげていく。

私は副市長さんと、実はこの間、神戸ガールズコレクションがありまして、そこでお会いしました。私もこのファッションを世界に売り込もうと思って、そのとき神戸ガールズコレクションに鳩山元総理の奥さんと一緒に舞台に立ったんです。それはあくまでファッションを売り込む。そういうふうに皆さんの港のあたりにあるいろんな資源、そこだけではなくて半径1時間2時間でもいいんです。そういうところと連携していく。そうすることによってメニューができます。

そういう意味で、恐らく皆さんが今まで点で見ていたものを線にすることによって、皆さんの観光のポテンシャルはまだ無数にあると思います。そういうのを引き出すためにはプラットフォームが要るんです。

いろんな方のいろんな意見、最後に必要なのは住民の意識です。私が好きなマルセイユ、

ナポリ、港は楽しいです。住んでいる方の笑顔、そしてまたスマイル、来て楽しい。やはり交流を促進するには、住民の笑顔が必要です。住民が下を向いて暗い顔をしている、怖い顔をしている、そんなところはオアシスにはなりません。おじいちゃんから子供までどうやって巻き込むのか。何よりもその地域を愛するという気持ち、このまちが好きだ、世界で一番このまちがきれいだ、外からお客さんが来たら笑顔であいさつする。これがベースにないとだめです。そういう意味で多くの方を巻き込んだ動きにしていきたいと思っております。

いま皆さんに大変心配をおかけしておりますが、外国人の数もかなり減少幅が小さくなってきました。今後、恐らく原発の収束の安全宣言が出て、そしてこのまま来年、震災復興1年というタームになったら、一気に潮目は変わらと思っています。現にアジアでは韓国を除いて中国、台湾そしてまた香港は、ほぼ今年の震災前の水準に戻ってきています。ただヨーロッパは、まだ少し距離が遠い分、慎重感がありますが、やはりこれから元気な日本を見せるということによって、一気に弾みをつけたいと思っております。

そして皆さんにぜひお願いしたいことがあります。今日は福島県いわきから来られておりますけれども、私は全国各地を見ましたが、震災の傷跡が深いのは福島です。本当に大変な状態です。私は震災が終わってから12回行きました。今週末も行きます。これは日本国民として、この福島からこれだけ多くの恵みをいただき、電力もいただき、そして傷ついている。国民挙げて、しかもこれは長期にわたってみんなで助けに行かないと、福島は元気にならないと私は思います。福島の復興なくして日本の復興はありません。福島の問題を常にみずからの問題だと思って、皆さん意識を持っていただきたい。そういう意味で、いわきで大会を開いていただくという皆さんのご英断、大変感謝いたしております。

観光庁も東北復興、福島復興なくして日本の復興はないという思いを持っております。本当にこの大会は、聞けば聞くほど我々観光庁にとってもありがたい会であると思っております。これから十分に連携をとらせていただきまして、皆さんと一緒に元気な日本をつくりたいと思っております。

今日は、このような場にお呼びいただきまして本当にありがとうございました。そして、素晴らしい会をセットしていただきました神戸の副市長さんはじめ皆さん、ありがとうございました。今後ともご指導よろしくお願ひしたいと思ひます。（拍手）

マリポートツーリズムの提唱



NPO 法人神戸グランドアンカー理事長 村上和子

みなとオアシス神戸の村上和子でございます。ふだんは「NPO法人神戸グランドアンカーの村上です」と言うところですが、私たちのここ神戸がみなとオアシスの仲間に入れていただいて、ちょうど1年がたちます。私はみなとオアシスに登録しないかと言われたこと自体がとってもうれしく思いました。それはなぜかという、今回のテーマ

になっております「マリポートツーリズム」、このテーマを私たちがNPOをつくったのは平成16年ですが、これは神戸の震災から9年目のことでした。9年といったら随分歳月を重ねたようですが、皆様、ここに来られるときのこの風景をちょっと比較していただきたいと思います。私たちがNPOを創立させたときには、なぜそういうことを考えたかという、この周辺はホームレスでいっぱいでした。それもホテルオークラ神戸の近くに、そしてメリケンパークホテルの近くにテント村です。そして、この前では布団を敷いて寝てるというようなホームレスもいっぱい見受けられたんです。

本当に「神戸が壊滅」、そんな言葉でもって表現された私たちの阪神大震災でしたが、その震災のダメージは半端なものではありませんでした。9年でその状態。私たちは港にやってきたとき、形あるものが神戸の中でいっぱい瓦れきの中に埋もれてしまいました。けれども、このまちには港があるじゃないかということに気づきました。ホームレスが主役になっていて、このエリアはどうなるんだ、もっとお客様、神戸を楽しんでいただけるお客様で賑わう港をつくり出していきたい。そして神戸を楽しんで、神戸の産業も発展するように、そしてその取り組みが神戸のすばらしいイメージをつくり出すように。そんな思いで活動するのはハードとなる拠点がなければ話が宙に浮いて、「あの人さっき言ったよ」と言っても忘れてしまいます。そういうことで私たちは、行動を起こすことのあらゆるテーマをここに落とし込んだ拠点をつくりました。

そして、「波止場町TEN×TENという名前、妙だな、「×」って書いてる」とか思われると思いますが、「TEN×TEN」というのは10掛ける10、100%をきわめたい。作家の皆さんですから、匠（たくみ）の人になりたい、アーティストになりたい、100を目指そう。TENという数字は、数字でも最高の数字を意味します。それを10で掛ける。それはすごいことじゃないかという思いもありましたし、拠点を持って周辺に点、点、点と、いろいろな取り組みを次世代の港を生かしたまちづくりということで取り組むことに

いたしました。

ホームレスからの立ち上がりですから、拠点としたこのエリアはまだ大変。不法駐車はもう、不法投棄もやって来る。おまけにここは警察の手が入らないような神戸市の市道ですので、今日も皆さんごらんになったと思います。警察と一生懸命に退治するのですが、車がとめられてしまう。そんな状態のところではありますが、一つ一つ整備をすることによって、この辺にホームレスではなく、お向かいにはラ・スイート神戸といいまして全室スイートルームのホテルが3年前に誕生いたしました。そして来年の今ごろには、この真ん前にセレモニーの会社が自社ビルを建てて、とても神戸らしいものをつくり出すということで張り切っておられる。それは神戸にとってもとてもうれしいことです。

そんなこんなを考えていくと、全くもって人を寄せつけないようなエリアだったところから、何とか港の情報、神戸らしさあふれるもの、ここにしかないもの、ここでしか味わえないものということにこだわり続けて、私たちの活動を展開してきたということです。自分たちの自慢をするために、ここに登場したわけではありませんが、来賓の皆様が、私が提案して皆様にお諮りしようとする「マリポートツーリズム」のいろいろな肉づけをしてお話しくささいましたので、むしろ私は、マリポートツーリズムがどういういきさつの中で誕生したかというお話をするほうがいいかなと思って、こういうお話を切りかえさせていただいたわけです。

そんなことでやり出した、次世代のまちづくりというマリポートツーリズム、どういう関係にしたかといいますと、「かけがえのない港に人を呼ぶ」。ですから、私たちの活動のスタートのときは、「神戸の“新しい”は港から始まる」というような、もう振りかぶったテーマでやりました。神戸の港は「新しいは港から始まる」ということになると、今まで港のことを観光のガイドブックになんて書いてもらったことはないでしょう。ポートタワーがあるぐらいです。北野町だとかほかのことばかり書いているんです。でも、そういう行動をとり始めたとき、言い続けたら、行動を起こしたら、そういう行動でメッセージを伝えたらわかってくれる人がいるというようなことで、今は6年を迎えるまでの5年と半年の歳月が流れております。

そしてマリポートツーリズムの言葉ですが、これは私たちの法人が考えたというかつくり出した。妙な言葉だな、長いなとかと言われてはしましたが、マリンは海、海洋のこと、沖に出て釣り船の方が観光している。その人だって海の上でビジネスを起こしてるじゃないか、人々の楽しみをつくり出しているじゃないか。海洋も視野に入れた「マリ」をつけました。「ポート」は港、それはもうおわかりいただけますね。

じゃあ「ツーリズム」は。これは言わずもがなですが、「ツーリズム」の「ツ（津）」の字には、かつての港ということも含めて思いを込めさせていただきました。それは私たちが震災というあんなダメージを経て、何年たっても、10年近くたとうとしているときでさ

え、元気がないどころか、まだまだ大変な状態だったんですね。それは行政に、私たちはこんなことをしたいということをお願いに行くというのも、何かもう優先順位が違うじゃないかと、県に行くのも違うじゃないかと思いましたが、本当だったら行政がしてくれたらいいなと思うことを、行政を待っているのには時間がかかりますから、行政に見てもらいながらというくらいの気持ちもありながらですが、自分たちの市民ができる限りのことで、市民目線で次世代のまちづくりをつくり出していこうとしたわけです。

そして、マリポートツーリズムの言葉の中に、それだけの港のことを思いをはせたと申し上げましたが、神戸は港の名前でも、古代は敏馬（みぬめ）の浦といって砂浜のところの港をそのように言うておりました。その後、神功皇后が三韓征伐——こういう言葉をこのごろは使えないんですが——に行ったときに生田神社に陣を張って、そしてかまぼこをつくったという原型は神戸が発祥の地です。神功皇后のエピソードを絡めたものがあります。神功皇后がこの地に泊まったのは船が動かないということでした。けどもそのときには都から見ると神戸は向こうのほうにある港だから、武庫泊（むこのとまり）と言われておりました。

来年話題になる大輪田泊（おおわだのとまり）は平安時代に、それこそ大陸を夢見て、そしてこここのところで人工の島までつくって国の繁栄を願った清盛がいらっやいました。その後は、この会場の中のみなとオアシスにも関連のあるところが多々あると思いますが、北前船で高田屋嘉兵衛さんがずっとぐるりと回っていろいろな日本の経済システムを残し、そして文化の交流、産業の交流、たくさんの社会事業もされてきた方が活躍した港があります。それは兵庫津（ひょうごのつ）と言われました。幕末には、龍馬さんが新しい時代を夢見て勝海舟と一緒にあって、ここで海軍操練所をつくって活躍した時代もありました。

そんなふうに、同じ神戸といっても、その時代とそれから場所によって呼び名も変えています。皆さん、全国には港町は幾つあるとお思いですか。私は自分で調べたわけではないんですが、いま国際貿易港として盛んな港、そして漁港も合わせ、いにしえの本当に元気がない港も、姿もない港も合わせると、3000とも4000ともあるんだそうです。そうするとマリポートツーリズムというツーリズムは、港、港の時代、時代に生きた先人達が残した港物語を訪ねながら、そしてその土地の人と出会い、土地の人と交流をし、そして港というのには大きな取り柄がありますよね。それは海に面している、海の恵みを受けておいしい新鮮な食べ物も必ずあるという利点があります。

そうすると、港、港を訪ねていくというマリポートツーリズムという言葉キーワードにしてみんなが頑張れば、私たちは神戸、兵庫県、阪神間で機会あるごとに提唱してきましたが、今回、開催地となり大会テーマとして取り上げていただいたということきっかけにいたしまして、これを私たちがやっていたテーマではなく、全国のみなとオアシスの港の皆様と一緒に、それからオアシスには登録されてなくても、今日、八戸からもみな

とまちづくりマイスターの方もお見えです。みなとまちづくりマイスターが頑張っている港は、既に頑張ろうとしている結晶みたいな形がいっぱいコアはあるということで、私はこの仲間に入れていただいたときに、私たちのこれまで取り組んできたものを皆さんとともに発展させていくことができるんじゃないかということ、力強く思いました。

そして、日本は小さな島国とみんな理解しています。しかしながら、四方を海に囲まれた、この美しい日本列島は本州も含めて 6800 の有人の島があるんだそうです。そして、その島の海岸線を延ばしてみると、世界で小さな私たちの国の海岸線の長さは、世界で6番目の長さを誇るそうです。その海岸線には何がありますか。私たちの愛してやまないふるさとの港があります。その港に人が来るようになったらいいな、おばあちゃんたちはそのままになってるけども、おばあちゃんたちにだって仕事ができるようにする、その仕掛けがやはり来訪者に向けては、訪れてみた人たちを喜ばせるホスピタリティーを持ちます。

そして、いろいろなふるさとの地域ならではの文化を見せていくものだと思います。観光は光を見ること、光とはその地域、地方の文化そのものです。そして、こういうことが皆さんとできたらどんないいかという思いの中に、クルージングの振興をも視野に入れて取り組んでいます。例えば国内だけだったら、平清盛でつながったところだとか、いろいろなことがあります。鳥取県の隣にお神楽で有名な島根県があります。もちろん広島も相当盛んですが、島根県の浜田市と港つながりのきずなをつくって、そしてこのTEN×TENの中にも浜田市を紹介するブースをつくってくださっています。そうすると、浜田市の方はいらっしやいませませんが、「浜田市のブースがあるんですね」「そうですよ、近くには石見銀山もありますしね。石州和紙もあります。あそこに行くと、お神楽だって一日じゅうやってるんですよ」というようなインフォメーションをします。

ですから、自分たちの頑張りだけでなくネットワークを組んだ、私たちの仲間たちのところも、いつもいつも紹介したり情報を発信することができたら、もっと港の元気に力が増してくると思います。そしてこの取り組みは、東日本のあの震災の悲劇の中にいらっしやるみなとまちに応援をするというシステムの原動力にもなってくるのではないかと思います。もう既にしたとおっしゃらないでください。なぜかという、私は皆さんにここが提案したかったところなのです。ここまでは皆さん、ご理解できますね。

かつて「グリーンツーリズム」という言葉を聞いたとき、ああ、田舎の田園風景を見るのね、あ、あれもツアー。じゃあ農家の人がつくったものをそこで買って帰るのね。それもわかります。ああ、すばらしいね。グリーンツーリズムが蔓延して広がっていきました。その後エコツーリズム。これには、エコツーリズムと感動を持った、言葉に引かれた方が、足腰の悪い高齢者でさえ「屋久杉を抱きに行ったのよ」という報告を私にしてくれたりします。

ですから何か行動を起こすときには、「この指たかれ」の「指」が要るのです。そして、

「この旗を見ながら歩きましょう。行きましょう」という目印が要ります。それが、私たちの港が元気になるための起爆剤になるのが、マリポートツーリズムということではないかと思ひまして、私たちの行動を全国の皆様と一緒に、21世紀の観光のキーワードは「マリポートツーリズム」という海の自然をいっぱいにした日本から始まった新しいツーリズムの概念だというふうにまでしていけるように、皆さんとともに歩んでいきたいと思ひます。皆さんのお話がとても長くなったので、私はこれで切りたいと思ひますが、長官と約束したことを皆様に報告をいたします。

それは、オアシスのみんながみなとまち、大きいと言われる横浜、神戸が頑張ってみたところで「あ、まちがやっている」というふうに言われたのでは、なかなか世界と立ち行かない。この結果が出たときには、国の施策として観光立国日本の大きな柱にしてくださいねということ、きっちり頼みました。「イエス」とまでは言いますが、中に帰っているいろいろな状況があるかもしれませんが、それに向かって皆さん頑張っていこうではありませんかということ、私からの提案とさせていただきたいと思ひます。どうも本当にありがとうございました。(拍手)